

平成 29 年度・島根大学教職大学院・夏期/地域教育課題支援事業：

「災害 × まち × 教育——学校の役割を考える——」を開催しました！！

(後援：鳥取県教育委員会・倉吉市教育委員会；平成 29 年 8 月 4 日 (金) 倉吉市 (上灘公民館))

平成 29 年度の島根大学教職大学院・前期授業「社会変化と学校役割」では、そのうちの一つのテーマを「災害」とし、この観点から平成 28 年 10 月の鳥取中部地震の経験を取り上げ、学校／教師のあり方を再考しました。本事業はその最終まとめに位置づくものです。また、本事業には、同じく倉吉地区の「災害経験」を学修テーマとした島根大学教育学部共生社会教育専攻学生の成果発表も含まれています。

当日は、鳥取県中部地区の教育委員会の指導主事、倉吉地区の学校の先生方にご参加いただきました。ご参加の皆様、そして後援頂きました鳥取県教育委員会・倉吉市教育委員会に対しまして、心より感謝を申し上げます。



【第一部】教育学部生による倉吉地区での被災状況・経験に関するフィールド学習（6月実施）の成果発表を行いました。

(テーマ：「地震に対する教育現場の備え／対応」「地震に対する地方行政の備え／対応」「地震に対する住民の備え／対応」「地域における文化財被災への対応」)

【第二部】教職大学院生による「災害と教育」に関するケースメソッド・ワークショップを行いました。

ケースメソッドとは教員研修等で近年用いられるようになったケース（事例）に基づく討論型の教授／学習方法です。今回は、災害時の教員としての判断をテーマにした学生自作のケース教材を扱いました。



【第三部】京都大学・山名淳先生より「災害と厄災の記憶は伝えられるか—山陰地方で考える—」と題した講演を頂きました。

鳥取県中部地区ご出身というお立場から倉吉という街のかたち（アーキテクチャ）、またご自身の研究成果（『災害と厄災を伝える：教育学は何かできるのか』（山名・矢野編著、勁草書房、2017年）を踏まえ、災害経験の記憶を可能にする「厄災の教育」「弱い教育」の構想についてお話をいただきました。防災教育の新たな視点として興味深いものでした。



(まとめ：丸橋静香)